

〔書 評〕

後藤 允著『尾瀬——山小屋三代の記』岩波新書 1984. v +189pp.

岩 崎 正 也

Masaya Iwasaki

この本は著者が、尾瀬の自動車道建設を阻止する闘いの途上で遭難死した「高校以来の友人だった」平野長靖を弔う鎮魂の書といえるにだろう。なぜなら、友人として、長靖が職場をやめて尾瀬に帰り、建設阻止に立ち向かうまでの苦悩が理解できなかったことにたいする悔恨の気持を、この書を上梓して初めて償うことができたからである。

後記によれば、毎日新聞に58年8月から3か月にわたって連載された「尾瀬 ひとと自然」に修正・加筆したものだという。尾瀬を守る平野家三代の90余年の歴史が、著者の自然にたいする畏れと優しさとをとおして語られ、友の遺志への共感が示される。

その尾瀬を、筆者は前に高校に勤めていた頃、全校登山の尾瀬・燧班引率者の一人として大清水と鳩待峠の両方から数回にわたって訪れたことがある。8月の尾瀬ヶ原一面にそよぐニッコウキスゲの群生図は忘れられない風景の一コマだが、筆者たちが尾瀬に入ったのは登山や、湿原植物をめぐる目的以外に、自然保護の実情を体験するためでもあった。第Ⅲ章に記されているように、尾瀬にとって最大の難問が屎尿とゴミの処理だったことが、二泊する間に、一人一人にゴミの持ち帰りが義務づけられていることなどの生活ルールをとおして筆者たちに理解できたと思う。

第Ⅰ章は、初代長蔵が19歳のときの明治22年、燧岳への登山道を拓いて、のち、神官の資格をとり、山頂に石祠を建てたが、そのため村人と軋轢をひき起すことになったこと、今も尾を引く尾瀬の水利権と発電所問題がすでに大正11年に始まったこと、尾瀬の水利権をめぐる巨額の資産を得る政治家と企業とにたいして反対運動を貫いたことを記す尾瀬開発の草創期。第Ⅱ章は、父の希望を素直に受け入れて長蔵小屋の経営を継ぐことになった心優しい二代目長英が昭和9年に現在ある小

屋を造り、第二次大戦中、山守りとして貧困と労働に明け暮れた生活を綴る尾瀬開拓の発展期。第Ⅲ章は、三代目長蔵が職場の仲間を裏切って尾瀬を選んだ苦悩と、自然破壊との闘いに至るまでの三代をとりまく村人や政治権力との対立・交渉を描いた現在までの開発を検討する時期。この歳月を新聞記者である著者が、平野家の人々とその反対者のどちらにも加担せず、抑制をきかせて過不足なく叙述しているにもかかわらず、尾瀬をめぐる、観光と保全の間をゆるる現在の諸問題が読者の心に重くのしかかってくる。その書く態度は、たとえば、グレアム・グリーンの『おとなしいアメリカ人』に登場する特派員のファウラーの場合に似ている。ファウラーが戦争当事者のどちらにも味方せずリポーターとして視ることに徹したように。本書を読み進むにしたがって、読者は、ちょうど、尾瀬ヶ原の木道を歩きながら、周囲の池塘にヒツジグサを見つけたときのように、さまざまなエピソードに心を洗われる思いを抱くだろう。長蔵が馬にくくりつけるほど大量の高山植物を採取した牧野富太郎を一喝する場面、李王殿下入山のさいの楽屋風景、大石環境庁長官と長靖との会見を実現させた意外な人物のことなど。第Ⅲ章の長蔵の死により、一篇のドキュメントは小説のように劇的な結末を迎える。そして遺志を継ぐ妻・紀子の献身ぶり。

この一書に余分な望みを言えば、人名・事項索引と尾瀬に関する書誌をつけると、さらに尾瀬にたいし理解と共感をかきたてる本になっただろう。

(いわさきまさや 教授)

(1991. 10. 3受理)